

ポール・ピツコーネ

— 反マルクス主義的マルクス主義

粉川哲夫 訳

西側におけるマルクス思想とマルクス主義全般の状況に関する今日の、つまりこの二〇年間の理論的な議論の焦点は、主として、マルクス主義が科学であるか、それとも批判であるか(アルチュセールのディアマート「弁証法的唯物論の軽蔑的名稱」対フランクフルト的解釈)という点におかれてきた。マルクス主義の科学主義的な解釈は、それが公式の共産党イデオロギーと両立し、伝統的な「社会主義」革命の将来性を巧妙に擁護したことが主にさいわいし、はじめのうちは成功をおさめたが、具体的な歴史的発展を正当化できなかった(1)ためか、あるいは十分に厳密であることに失敗した(2)ためか、次第に評判を落していった。その結果、この科学主義的解釈は、西側では主としてアカデミックな骨董品として、東側では軍閥制的(stratocratic)となるしかない体制(3)の「正統化の科学」として老醜をさらしている。フランクフルト学派による第二の解釈も、それほどうまくはいない。フラ

ンクフルト学派のマルクス主義解釈は、マルクスの分析の主要なカテゴリーを歴史化した際に、非常に多くの伝統的教理を廃棄しなければならなかったが、あとに残ったものに依然として「マルクス主義」のラベルをはりつけることは、多大の困難なしには不可能だった。それゆえ、マルクレーゼ、アドルノ、そしてその他の、依然ある意味でマルクス主義者であった人たちが、自分たちをマルクス主義者だと主張したにもかかわらず、彼らの分析は、一体に体制順応的な左翼からは、マルクス主義思想の主流からはずれたものとみなされたのである。

今日の奇妙な状況は、その圧倒的な政治力によって主流からはずれた他のマルクス主義解釈をすべてマージナルなものにする全体主義的な体制とマルクス主義とが複雑にからみあっているという点で、マルクス主義がアイデンティティの深刻な危機のぬかるみにおちこんでいることである。ソ連型の体制にはマルクス主義

的な性格が欠けているといくら強く主張してみたところで、そうしたやっかいな担保からマルクス主義を解放することに成功したためにはない。こうした事態は、いわゆる正統派マルクス主義者たち(主としてトロツキストやマルクス・レーニン主義のプランドの信奉者たち)の大半が、中央の計画によって規制され、党の装置を通じて労働者階級によって動かされるといった社会主義国家を結果的に生み出す一九世紀的な階級対決思想に依然しがみついているという事実とセットになっているわけだが、この事態は、社会主義の民主的側面についてはごく最近になるまでそれほどまじめには考察されてこなかったということを意味する(4)。いずれにせよ、ポーランド、強制収容所、その他の非理論的な問題を別にしても、『新しい階級』、中央集権的な計画に内在する根絶不可能な欠陥、福祉国家型の資本主義的再編成の失敗といった問題に関して最近までに言われてきたことは、正統派マルクス主義の残りの部分ならば社会的現実に対する有意義なアプローチとなりえたかもしれないような主張をも、ことごとく効果的に失脚させてしまった。では、マルクスの思想はどこに残されているのだろうか？

こうしたあやふやな政治状況にもかかわらず、マルクス学の方は、一九二〇年代のはじめから一九六〇年のなかごろにいたる四〇年あまりのあいだに、政治面ではスターリニズムとファシズムが不可能にしてしまったまじめなレベルを最終的に獲得した。それゆえ、今日ではマルクスの思想のうち研究されないままになっ

ているものはほとんどなく、さしあたりそのバランス・シートを作ってみると、明らかに、マルクスはおそらく同時代の思想家のうちで最もブリリアントな思想家の一人ではあったが、とっくの昔に越えられてしまった歴史的文脈と複雑に結びついた時代の子であるということがされるべきなのである。このことは、今日生き残っているマルクス主義の遺産のなかではマルクス思想の個々の特質がなぜ新しい社会的発展によって時代おくれなものとなった個別的な諸条件と直接むすびつかないかを説明する。それゆえ、西欧マルクス主義と呼ばれたものが——マルクス主義の生きた伝統をとりあげなおし、発展させなければならなかったかぎり——政治的な臆病さやアカデミックな出世主義からよりもマルクスの精神への忠実さからマルクス主義の哲学的な次元におもな焦点をあてたことは驚くにあたらないし、このことは幾度か示唆されてきた(5)。

いかにしてケインズ主義と福祉国家が労働者階級を統合することに成功し、労働者階級が先進資本主義社会でもっていたかもしれない革命的潜勢力をことごとく骨抜きにしてしまったか、あるいはいかにしてレーニン主義的な組織方法が相対的に「開かれた」社会のなかでは全く適用不可能であり、反生産的であるか、といった周知の議論をくりかえすよりも、依然として生きた遺産の一部をなしているマルクス思想の二つの次元、つまり弁証法と物象化の理論に焦点をあてる方が実り多い。労働価値説や利潤率の低下傾向の法則のようなマルクス経済学の主要な教義は、合理

主義の形而上学から外挿された支持しがたいもの——あるいはアドルノが「概念の支配」と呼んだもの、つまりすべての意味ゆたかな人間活動を基礎的な最小限の、しかし等しく無意味で抽象的な地層すなわち労働に不当に均質化するもの——あるいは理論的には空虚で、政治的には資本主義のさげがたい死と、社会主義と共産主義によるその必然的な交替とを信じて旗をふるささえにかならない検証不能な法則まがいの仮説、といったものであることがとくに明らかになっている。しかし、弁証法と疎外論がともにそのアク、チャリ、ティを維持している一方で、それらは、根の深い困難から一度として解放されたことはなかったし、現在でも解放されてはいないのである——とはいえ、こうした困難は、マルクスの思想に内在する弱さを暴露しているというよりも、むしろその力を証明するものなのである。

マルクスの思想の基礎的な教義の一つとして、概念的な構造の歴史的な基礎づけがあるが、これは、ある時代——マルクス自身の時代も含めて——の思想を伝統ないしは遺産として無批判に他の時代に単純に置きかえるのを防ぐ。すなわち、ここでは批判とは、無視され過小評価されざるをえない諸特徴を擁護し、総体的なものを新しい社会・歴史的条件のなかに再構成することによって、あらゆる個別的な立場につきものの一面性をのり越える過程なのである(6)。しかし、マルクスの思想のもともとの教義が批判のこうした治療的な過程を必要条件にしているとすると、この教義は、大抵のマルクス主義者がそれを進んで受けいれるときよ

りもはるかに大規模に——マルクス主義の精神を救うためにマルクス主義が身につけてきた歴史的に特有な諸形態を放棄することまで——再構成を要することになる。弁証法と物象化の理論には依然将来性があるが、それはこれらの伝統的な形態のなかにはないのである。

マルクスが弁証法について重要なものあるいは体系的なものを書くことに成功しなかったということは、マルクス自身が知的な整備を欠いていたということを意味するというよりも、弁証法自身の内部にある解消しがたいディレンマを示唆している(7)。それは、具体的な全体性の論理としての弁証法そのものの性格と全体性の了解に必要な諸条件と関係がある。純粹に具体的な全体性は、それ自身の構成にとって不可欠の特質として全体性の自己了解という要素をも含まなければならないのだから、弁証法は、それ自身の個体発生について反省を行なうヘーゲル的な絶対者の観点からしか可能ではなくなるわけである。しかし、こうした観点には非常に保守的なものが含まれている。それは、意味ゆたかな内的対立性をしめ出すだけでなく、一層的な変化をも締め出す傾向があるわけだが、というのも、絶対者の観点からするとそうした変化はすべて有機的な内的修正としてしか姿をあらわすことができないからである。絶対的なものが現存する制度的な構造と同一化されるような客観主義的なわく組みのなかでは、弁証法は、

ソヴェエト型の社会ではプロシヤの國家ないしはその『プロレタリア』版の公式的な正統化イデオロギーになる傾向がある。意識は、所与と強制的に一致させられ、そういう仕方でもっと身をもちこたえるような合理性を所与に授けるので、意識は、自己了解の最中に意識自身が構成する非常に客觀主義的な弁証法の罫にはまるわけである。弁証法のこうした苦難については、かつてメルローポントティが『弁証法の冒険』のなかでその変遷をたどり、分析したことがある。

革命的な継統性(processuality)を重視して絶対者の観点を拒絶することは、絶対者自身がその存在と現実化を否認している当の絶対者を暗黙に前提してしまうことになるだけでなく、弁証法を単なる方法に格下げすることになるが、主体的な自由の次元を擁護するためにこの方法としての弁証法は、それ自身が存在の客觀的論理であるふりをするのできるために必要な必然性までも破壊してしまう。弁証法は、「總体的なものを構成するのではなくて、總体的なものの中に置かれた思想(8)のレベルにまで墮落するのである。そのため、たとえそうした実存的・現象学的な弁証法解釈が政治的プロジェクトに発展させられるとしても、数十年まえのロシアの場合がそうであったように(9)、その努力のすべてが、回避しようとしていたほかならぬ客觀主義の陥穽にふたたびおこむ危険にさらされる(10)だけではなく、たかだか、正統主義のソヴェエト戦車と効果的にはりあうにはあまりに弱すぎる一種のチェコの『修正主義』が生まれるにすぎないのである。

すべてが行なわれ、言われないまでは、弁証法の実存主義的かつ現象学的な再概念化が過去数十年間になしとげようとした——が、成功しなかった——ことは、主体が不可分な部分をなす全体性の断絶と矛盾を忠実に反映するモナドと解された主体のうえに弁証法を基礎づけることによって弁証法を救うことであった、ということになる(11)。しかし、その企ては、十分にラディカルであったわけでも、弁証法的であったわけでもなく、たとえ主体に基礎が置きなおされようとも、単に量的な修正以外の何ものをも帰結しえない一九世紀的な概念的わく組をのり越えることに結局のところ失敗していたのである。このため、ロシアの主要なインバクト(それが彼の命とりにもなったわけだが)は、一方でマルクス主義的弁証法の階級的な基礎づけを粉砕し、他方で、批判の部分に残されたほとんどすべてのものを救出しながら、同時に、それを資本主義的搾取に単純に対峙させるよりも、むしろそれを官僚制的・集団主義的な軍閥制における支配に対峙させることをめざした。メルローポントティは、彼の最後の未完の著作『見えるものと見えないもの』のなかで一九世紀的な概念的わく組そのものとラディカルに手を切ろうとしたが、彼の早すぎた死によって彼の遺産は、きわめて非弁証法的な一種の概念的体制順応主義をその最も顕著な性格とする構造主義によって受託されることになる。こうした歓迎すべからざる宿命にもかかわらず、弁証法がマルクスの思想の最も重要な遺産の一つであることにはかわりがないが、それは、弁証法が、その精神に則って、その時代おくれの概

念的な死骸から解放され、効果的に基礎づけしなされる場合でしかない。言いかえれば、マルクスにおいて弁証法は、使用価値を犠牲にして主として交換価値に限定されてきただけでなく、自然、世界を犠牲にして社会的なものに限定されてきもしたわけだが、弁証法は、階級なき社会へのプロレタリアートの道としてではなく、エコロジイとして生きつづけているのである。全体性は、もはや資本主義的な社会関係にだけ限られているのではなくて、その觀念論的な名称を失い、エコシステム(ecosystem)をおおうところまで拡大されている。推進的な要素としての労働は生命に道を譲り、政治自身は次第に、政治の拘束的な形式的自己限定を広げる新しい共生主義的(communitarian)な形の社会組織と交替している。

全体性は、政治的にはスターリンによる道具化によって評判を落し、理論的にはその後の批判(フーコー、カストリアディス、批判理論等)によって攻撃されたが、全体性は、エコロジイのなかに強烈な姿で再現してくる。全体性は、『現に存在する社会主義』の内部でなりはてたような官僚制のイデオロギーとしてではなく、最も些細で一見何の役にもたないかにみえる有機的組織にいたるまでのライフ・サイクルを維持するために必要な微妙なバランスを意識的に保証しようとする努力に必要な前提としてふたたび姿を現わす。

社会的エコロジイは、それが当然受けるべき組織的な解明を受けているわけではまだないが、それは、さまざまなマルクス主義

がながらく失ってきたある種の解放的展望を与える点で一層効果的であることがすでに示されている。資本の効率性を(生きた労働とエネルギーとを置きかえて資本の有機的な編成をやりくりすることによって)維持するために核エネルギーを発展させようとする気狂いじみた競争、兵器競争、消費主義、あらゆる形の支配等々に挑戦しながら、社会的エコロジイは、今日の主要な諸問題に対する有意義なアプローチを展開するだけでなく、マルクス主義がその「啓蒙」的ならびに合理主義的偏見のために盲目であった、ないしは他に譲り渡してきた諸問題に対決しもするのである。マルクス主義の遺産は生き続けるが、それは、外見的には反マルクス主義の姿をとるしかない。マルクス主義の遺産の新しい歴史的文脈を救い出すには、その古い伝統的な諸形態を捨てる必要がある。ここでは、そうした展開が含意していることを組織的に解明することはできないが、それらの含意が今後十年間の理論的ならびに政治的な議題の最優先事項となることはほとんど疑いをえないように思われる。

物象化の理論の状況は、弁証法の苦しい状況とさほどちがいはない。物象化の理論には、それがはじめて形成されたときから解決したい問題が含まれており、ひきつづき形成しなされるにつれて物象化の理論は次第に維持できなくなっていく。今日、意味ゆたかに概念化しなされたものと、最初のものとのあいだ

には大きなギャップがある。いずれにせよ、マルクスが壮年期の著作のなかで疎外のテーマを前科学的なヘーゲル主義のお荷物だとして放棄したのかどうかについては、ながたらく退屈で、結局のところスコラステイックな議論をくりかえさなくても、マルクスによる資本主義社会の告発が、『非人間化』の責任を問われる以前に、その力の大半を失っていたらうということは明らかだ。資本主義を究極的に運命づけているものは、資本主義の内的論理から展開したもので、つまり資本主義がひきおこす不平等や資本主義が要求する人間的犠牲などではなく、資本主義が人間を物に、あるいは人間以下のレベルにひき下げるといふ事実である。

しかしながら、マルクス主義が法典化されたのちにマルクス主義におこったことは、疎外が、完全に財産関係(経済的搾取)に根ざす形式的な司法的關係にひき下げられたことである。それゆえ、一旦、生産手段の私的所有が廃止されてしまうと、疎外は自動的に消滅すると解された。これにもとづけば、ソ連型の社会の労働者は、原理的には、疎外されていないことになる。共産主義の虚構の話はもうよそう。マルクスないしルカーチの疎外論⁽¹²⁾のすべてを構成しなおさなくても、その最も好意的な解釈においてさえ原形を維持できないということは明らかである。対象化が物象化になるわけではないのだとすれば、私有財産を撤廃することだけではなく——もっとはるかに困難なこと——『集団意識』を達成することが必要であった。が、これは、ヘーゲル以来、誰一人として信頼にたるやり方で回避することができなかった形而上学

的罫である。

そういうわけで、疎外論は、正統派ないしは半正統派のマルクス主義者によって即決の官僚主義的埋葬をほどこされるか、あるいは、現存する社会のモラリスティックな批判に折にふれて基礎を与えるアカデミックな骨董品として老醜をさらすかしかないのである。アセンブリー・ラインで働く労働者にはその最終的な製品の構造も機能も十分に把握することができないが、この労働者がどのようにしてその最終的な製品に同化することができるかということは、この労働者の意識と社会内のその他のすべての人々の意識とを混ぜあわせる方法を考え出すのでなければ、決して明らかにはならない。そういうことがすぐ可能であるようにはみえないので、疎外というテーマは、何らかの意味ある政治的表現を受けとることができないのである。

だから、問題は残されている。たとえ、現存する社会関係に關していかなる治療法もすぐには得られないとしても、その症候の方はすべてそのままなのである。消費主義はこの病気に一時的な小康状態を与えたが、確実な不断の経済発展——従って連続し強化された消費主義——に対する障害は、そうした療法の限界を物語っている。この問題をあつかう場合、マルクスが、それ以前の宗教的な論述方法とは対照的に、疎外がとりわけ社会的、歴史的なものに根ざしていることを強調したことは、依然として重要である。しかし、いかなるやり方で解決を試みるにせよ、それは、疎外の問題を現在の分業と産業構造から解放するのではなく、

らないだろう。分業と産業構造は、現在、大きな修正をこうむりつつあるので、増大する自由時間と再編成された生産過程との関係でこの問題をとりあつかうことも、もはやそれほど空想的なことではない。が、そういうことになる、マルクス主義の二つの主要な教義、つまり労働に付与された特権的な位置と中央集権的な計画の優位は放棄されなければならないだろう。

こうした問題は非常に重要であるが、少なくともいま明らかたことは、連続的な成長にも現在の消費主義的な条件内の生活の質にも加担しないエコロジの観点のなかでは、疎外の問題にとりくむことが一層容易であるようにみえるということだ。職人や「田園的愚行」の社会へロマンティックに回帰することを思いえがいてみなくても、今日、新しいテクノロジは、重工業の方は同時に温存させたまま、職人的な手ぎわをそなえたおのぞみの特製品の大半を提供することができるような手段を与える。疎外の問題は、その重いマルクス主義的な足かせから解放されるならば、新しい意味——今度は神話的な解決方法を要しない意味——を獲得するわけだ。

マルクスの遺産は、依然、現代文明の複雑な相貌の一つをなしている。しかしながら、逆説的な状況は、今日マルクス思想の精神に忠実であろうとするには、さまざまなマルクス主義に対して積極的に対立する必要がある、たとえば修正された歴史論、新し

い階級理論、『資本論』の現代版といった別のマルクス主義理論を構築しようとする試みる畏にはまってはならないということだ。マルクスの著作とマルクス主義全般が、冷戦やファシズムやスターリニズムのために神秘や嫌疑や無知の暗雲に包み隠されているのはもはやなくなつたいま、マルクスの著作とマルクス主義が今日の世界に対して果たした主要な貢献を奪還することが最終的に可能になる。しかし、そうした奪還は、本当の意味で弁証法的でなければならぬだろうし、単なる転換ではなく、その伝統を組織的・批判的に基礎づけしなおすことにもとづいた止揚でなければならぬだろう。

(1) Edward P. Thompson, *The Poverty of Theory and Other Essays* (Monthly Review Press: New York, 1979).

(2) Lucio Colletti, *Il Tramonto dell' Ideologia* (Laterza: Bari, 1980) もとよりコレッティはマルクス主義の主導的な知識人であり、彼の『イデオロギーと社会』(*Ideologia e Società*)や『マルクス主義とヘーゲル』(*Il Marxismo e Hegel*)は、『ニュー・レフト・レビュー』のおとろえつつあるイギリス・マルクス主義のためのささえとしてただちに英訳されたが、彼自身が強調しつづけたのは、マルクス主義の活力にあふれた解釈と「科学性」という厳密に新実証主義的な概念であり、この概念を彼は、完全に不適切なもの——「修正主義論争」とともにすでに第一次世界大戦以前にすっかり評判を失ってしまった、歴史的に時代おくれのマルクス主義解釈の単なる論理的帰結、だとして最終的に拒否しなければならなかった。わたしの「ユーロコミュニズムの将来」(*Theory*

- and Society*, vol. 10, no. 5, 1980, pp. 721-732) を参照せよ。
- (8) 軍閥制 (stratocracy) についての論述については『戦争を止めたこと』(Devant la Guerre, Fayard: Paris, 1981) を参照せよ。
- (9) これらの問題については『平等の諸形式』(Telos, no. 32, Summer 1977, pp. 6-26) を参照せよ。またホルベント・ボックの「マルクス主義的国家論は存在するか」および「代議制民主主義に代する代案は存在するか」(とちぎ *Telos*, no. 35, Spring 1978, pp. 5-30) を参照せよ。
- (5) Perry Anderson, *Considerations on Western Marxism* (New Left Review Books: London, 1976) 参照。
- (6) これについては『現象学的マルクス主義』(Telos, no. 9, Fall 1971, pp. 3-31) [粉川哲夫編訳『資本のシラケツク——ネオ・マルクス主義をめぐって』せりか書房(所収)] を参照せよ。
- (7) この苦境については『徹底した議論』については「わたしの『ネタリム・マルクス主義』(Italian Marxism, University of California Press: Berkeley and Los Angeles, 1983, pp. 47-53) を参照せよ。
- (8) Maurice Merleau-Ponty, *The Adventures of the Dialectic*, translated by Joseph Bien, Northwestern University Press; Evanston, Ill., 1973, p. 204)
- (9) Karel Kosik, *Dialectica del Concreto*, translated by Gianlorenzo Pacini, Milan, 1965; シュタインの春の『内部』のロシークのホリチャツクスと役割についての議論としては「わたしの「チュロ・マルクス主義——カレル・ロシーク」(*Critique*, no. 8, Summer 1977, pp. 43-52) [『資本のシラケツク——ネオ・マルクス主義をめぐって』(所収)] を参照せよ。
- (10) Jan Patočka, *Il Senso dell' Oggi in Cecoslovacchia*, Milan, 1970, pp. 110-117.
- (11) Enzo Paci, *The Function of the Sciences and the Meaning of Man*, Northwestern University Press; Evanston, Ill., 1972.
- (12) アルトゥス・エントゥーラについての幅広い解釈としては「バーテル・ホルマン『疎外——資本主義社会におけるアルトゥスの人間概念』(Bertell Ollman: *Alienation: Marx's Conception of Man in Capitalist Society*, Cambridge University Press; Cambridge, 1971) 及び「マンデルスター・アントニー・ブロン」『若年エントゥーラと西欧マルクス主義の諸起源』(Andrew Arato & Paul Breines: *The Young Lukács and the Origins of Western Marxism*, Seabury Press: New York, 1979, pp. 113-141) を参照せよ。
- Marx's Thought Today; © 1983 Paul Piccone.

思想

1983 3

マルクスと現代

廣松 涉 河野 健二 阪上 孝
中岡 哲郎 平田 清明 山崎カヲル
今村 仁司 山本 啓 粉川 哲夫
竹内 芳郎 いいだもも 小阪 修平
戸田 徹 山之内 靖

海外特別寄稿

S.アミン	E.バリバール	G.ブランド
A.G.フランク	I.ヘルマン	E.マンデル
P.ピッコーネ	P.M.スウィージー	A.ヴァリツキ

No. 705

岩波書店

昭和二十三年七月二十五日第三種郵便物認可
昭和五十八年三月二十五日運輸省特別扱承認雑誌第三二六号
日発行(毎月一回五日発行)七〇五号